

小学校の教育現場で働く、教職員の皆様へ

サポート通信「つなぐ」

編集：こども発達相談センター

第8号



令和3年2月発行

連絡先 23-7534

本年度も残り一か月を残すのみとなりました。昨年度末から新型コロナに振り回され、例年とは違う学校生活のまま一年を終えようとしています。しかし、新しい生活様式ではありませんが、今年のような一年が標準になっていくのかもしれませんが。さらに教科書等の電子化が進み、オンライン授業も一般化されていく可能性もあります。新型コロナを機会に、学校教育も大きな転換を求められているようです。

世の中の変化とともに、教育界も大きな変革を求められています。対面でないと子どもたちが身につけられない力は何か、そのために教師が身につけるべき力は何か、そして、学校はどのような体制で進むべきかを本気で考える時代になったようです。元に戻る日を待つのではなく、将来を見据えた教育を進めていく必要があるようです。

さて、今回のサポート通信では、こども発達相談センターから出ししている新入学児の「サポート情報」に、「ASD」「ADHD」等の診断名を記載していない理由をお伝えします。



※ 診断名を記載しないのはなぜ？

学校を訪問してサポート情報をもとに対象児の説明をしていると、「この子は診断名がついていますか？」と聞かれることがよくあります。質問をされたときは答えていますが、サポート情報には記載していません。診断名を聞くことで、「自閉スペクトラム症ならば、こういう対応をすればいい」と簡単に考えてほしくないからです。十人十色といわれるように、自閉スペクトラム症の子どもが100人いれば、100通りの対応があります。

こころとそだちのクリニックむすびめ院長の田中康雄氏は、著書「発達障害だけで子どもを見ないで」の中で次のように書かれています。

「例えば、車のタイヤがくるくる回ったり、換気扇が回ったりするのを、ずっと見続けているようなお子さんがいたとします。そういう子に対して、『やっぱり自閉症スペクトラム症って、こういう回るものが好きなんですね』とひとくくりに表現してしまうのは、僕はその子に失礼だなと思ってしまうのです。(中略) 毎分何回、回っているんだろうとか、このスピードっ

てどれくらい速いのだろうとか、回っているくせに、タイヤや換気扇自体は目が回らないのかとか、そうやって考えているその子と付き合うと楽しいのに…と。」

また「AクリニックではADHDと診断されたのに、B病院では自閉スペクトラム症と診断された例もあるように、医師の間でも診断名が一致しないこともあります」とも書かれています。

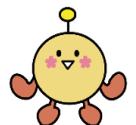
発達相談センターでは、診断名からその子を理解するのではなく、その子の行動、反応、会話、表情など様々な事実から特性を理解し、良いところを大切にしつつ、困っていることに対しては適切に支援をすることが必要だと考えています。ただし、表面だけを見ては理解できないことが多いので注意が必要です。

「やらない」ように見えることの中に、「できなくて困っている」ことがたくさんあるので、その子の心の中を見る努力が必要です。

※ 参考資料

「どうしてこの子はこんな行動をとるのだろうか…」と悩んでいるときに、陥りやすい誤りは「この子には障害があるから…」 「もともと性格だから仕方ない」という理由づけです。(中略) 計算ができない様子を見て、算数が苦手とラベリングしているにもかかわらず、算数が苦手だから計算ができない、と理由付けしているのでは、結局どのようにしたらその問題を解決すればよいのか分かりません。

(子育てに生かすABAハンドブック・井上雅彦監修より)



ABAを学校教育や子育てに生かそうとする際に気を付けなければならないことがあります。それは単純に「子どもに言うことを聞かせる」や「扱いやすい子どもに育てること」をゴールにすべきでないということです。例えば、「自分の意見を押し殺して周囲に合わせる子ども」「大人の指示に無条件に従う子ども」はあたる意味で全て「行動問題予備軍」と言えます。

行動支援において重要なことは、「問題行動をやめさせること」や「言うことを聞かせること」ではありません。「子どもの適応的な行動を育てること」であり「子どもが自らの人生のかじをとれるようにすること」なのです。何を問題と捉え、何を目標に設定するのか、その検討は全て「幸せに生きる子どもの姿」に直結していなければなりません。

(行動問題を解決するハンドブック・大久保賢一著より)